

源氏の花

松田修

山  
氏  
の  
花

まつだ おさむ  
松田 修

明治36年6月山形県に生る。

東大農学部卒，現在社団法人植物友の会副会長兼事務局長。

著書に「万葉植物新考」「万葉の植物」「植物世相史」「萬葉の花」「花と文学」等。

現住所 東京都世田谷区砧 2-7-12

おおたしくにひこ  
大西邦彦

明治38年9月香川県に生る。

東京写真専門学校卒，現在全日本観光写真協会会長。

著書に「日本名歌の旅」「花と詩の旅」等。

現住所 京都市北区紫竹下梅ノ本町40番地

## 源氏の花

---

昭和<sup>35</sup>48年3月5日 初版発行  
昭和53年1月10日 再版発行

著者 松田 修

発行者 本田 優章

発行所 株式会社 芸 艸 堂  
東京都文京区湯島 1の1の9  
電話 東京 (253) 2 0 2 8  
京都市中京区寺町二条南  
電話 京都 (231) 3 6 1 3

---

原色版印刷	光村原色版印刷所
本文印刷	猪瀬印刷所
製本	丸山製本所

---

源  
氏  
の  
花

## 著者のことば

難解な『源氏物語』も、与謝野晶子、谷崎潤一郎、村山リウ、恩地文子さんなどという先人の、情熱を傾けた口訳によって、私たちにもたのしくこの古典を味わうことができるようになった。読書人にはまことに有難いことである。私はさきに、同じ芸艸堂から新書版で『源氏の花』を出したことがある。昭和三十三年秋の著作である。ささやかな本であるが、源氏物語の植物を解説した本としては、この本が日本ではじめての試みで、これは私の万葉植物の研究の一環として、万葉時代の植物と平安時代の植物との比較研究という意味もあつたが、何よりこの古典の美しい自然描写の背景になつている植物には、どんなものがあつたか、それがまた作品にどう生かされているか、また平安好みの花は、どういうものであつたかなどを、生活、文化の面からも観察してみたいと考えていたからである。私はこうして植物の面からも当時の風土や生活や文化などの一面を知ることができた。

しかし年が経つて、この本にも何か物足りなさを自分で感ずるようにな

った。『源氏物語』の情味がこの本には欠けているように気づいたからである。そこで、万人が親しめる『源氏の花』はどういう内容にすべきかを考えて、全文を書きかえ、こんどの新本には「源氏物語のあらまし」も付録にした。これは花は物語と一体になっているからである。したがって、この物語をさきによまれてから、花の解説をみてもよいし、花の解説と物語を照らしてもよい。いずれにしても、こうすることによって源氏の花は生きてくるように思ったのである。

なお付録の「源氏物語のあらまし」は、村山リウさんの『源氏物語』（主婦の友社版）を参照し、本文の解説には谷崎さんの『口訳源氏物語』（中央公論社版）を引用した。また前書の『源氏の花』は、白黒の写真であったが、新本は大西邦彦さんのカラー写真でかざることができた。かくて心ゆく美しい『源氏の花』が生まれたことをうれしくも幸いに思っている。どうぞ皆さんも世界に誇るこの『源氏物語』の美しさを、花の上からも味っていただきたいものと思う。

昭和四十八年三月

松田修

目次

春

うめ

かつら

きり

さきくさ

さくら

さうび

つつじ

つばき

なし

ふぢ

夏

あふち

うのはな

やなぎ

やまなし

やまぶき

あふひ

せり

ちばな

つくし

ところ

わらび

けし

さゆり

くちなし

たちばな

あさがほ

あやめ

からなでしこ

かんざう

くれなる

秋

えび

かうじ

かしはぎ

かへで

くり

ははそ

くるみ

つた

つきくさ

はちす

はまゆふ

ほほづき

みくり

むらさき

ゆふがほ

ききよう

きく

くず

しをん

すすき

なでしこ

はぎ

ふちばかま



つるばみ  
まゆみ  
もみぢ  
あゐ  
あし  
いね  
冬  
あづさ  
さかき  
ささ  
しきみ  
しの  
しひ  
すぎ  
たけ

むぐら  
よもぎ  
りんだう  
われもかう  
をぎ  
をみなへし  
つげ  
ひのき  
びらう  
まき  
まつ  
やどりぎ  
やまたちばな

その他

あかね

あさつき

うり

くたに

こけ

こんごうし

したん

すはう

せんだん

たへ

たたらめのはな

源氏物語のあらまし

ちやうじ

ちんこう

にんにく

のきしのぶ

ははきぎ

みる

め

も

やまある

わかな



# 春



やまなし ▶▶  
さまくら ▶▶





つ く し  
せ り







ちき  
ふま  
ふ





